

比較思想とは何か——方法論的な回顧と展望——

斎藤 明

はじめに——比較思想学会をめぐって——

比較思想学会が一九七四年に創立してから三十七年が経過した。既存のディシプリンをふまえながら、特定の学問分野に固定することなく、種々の方法を駆使して、学際的研究を目指すという目的を掲げ、大会および研究会の開催ならびに機関誌「比較思想研究」の発刊をとおして積極的な活動を展開してきた。現在では、約一〇〇〇人の会員を擁する全国学会に成長している。ただし、これは多くの学会や研究会組織についていえることであるが、本学会もまた、いま改めてその意義と方法に関して、忌憚らない批判や議論をとおして回顧と展望を行う必要があると痛感している。

一 比較思想研究の一般的な構造

比較思想 (Comparative Philosophy) 研究の基本的な枠組みは、「トピックAをめぐるB思想とC思想の比較考察」といえるであろう。このばあい、トピックAには「人間観」「身心観」「死生観」「自然観」「男女観」等々の大きなテーマもあれば、「価値」「楽」「信」「意味」「時間」「安楽死」「詩」等々の個別のトピックや概念に関わるものもある。一方また、B思想とC思想におけるBやCについては、実存哲学や現象学、唯識思想や朱子学など、文字どおりの哲学思想や学説が言及されることもある。例えば、ナーガールジュナ（龍樹）、アリストテレス、カント、朱子、西田幾多郎などの人物やその著作をさすこともある。

ちなみに、今回の個人発表を例にとれば、それぞれのアプローチは、おおむね以下のように概括されるであろうか。（なお、

ここでは発表要旨として事前に提出された文章のみを対象にしている。要旨と実際の発表内容との間に発展的な差異も考えられるが、最終的なタイトルと議論の詳細は本誌に掲載された各論考を参照されたい。

第一部会では、1「如」とは何を意味するか一般若經典から親鸞へ」（木村正代）、2「看護理論と縁起思想における「関係性」の対比」（鈴木聖子）、3「帰命とバクティ——『無量寿経』と『バガヴァッド・ギター』にみる信仰の核心——」（三木悟）、4「白隠の禅思想と『軟酥の法』」（半田栄一）の四つの発表が行われた。一方また第二部会では、5「メンデルスゾーンとマイモニデス」（藤井良彦）、6「フロイト著『機知』について——欲動とベルグソンの生命——」（片山文保）、7「小野功の『いのち／大地の思想』への一考察」（鳥居雅志）、8「心はなぜ形而上学の問題となるか——ベルグソンと西田を手がかりに——」（沖永宜司）の四つの発表があった。

第一部会の1は、真如とも訳されることになる「如」(caṭha)「A」をめぐる、般若經典「B」と親鸞の思想「C」を、とくに「金剛般若経」における「如」と「末燈抄」における「自然法爾」を中心に比較考察する。2は、自己と世界の「関係性」「A」の視点から、看護諸理論「B」と仏教の縁起思想「C」とを比較考察する。3は「絶対的帰依の信心」「A」をめぐる、『無量寿経』における帰命(=南無 nāmas)「B」と「バガヴァッド・ギター」におけるバクティ「C」とを比較考察し、両

者に通底するものを探求する。4は全人的医療という視点「A」から、白隠による「軟酥の法」と呼ばれる練丹術「B」と現代の統合医療「C」とを比較考察する。

第二部会の5はユダヤ啓蒙思想という通時的な観点「A」から、中世一二世紀のマイモニデス「B」と近世一八世紀のメンデルスゾーン「C」の啓蒙思想を比較考察し、前者の後者に対する色濃い影響を明らかにするとともに、後者を相対化することを目的として考察を加える。6は欲動(死の本能≡非生という絶対的安穩を回復しようとする傾向)「A」をめぐるフロイト「B」とベルグソン「C」との比較考察である。7は二〇一〇年七月に全面施行された改正臓器移植法を契機とする考察である。いのち「A」に視点をあて、小野功の「いのち／大地の思想」「B」と、家族の承諾によって臓器移植への道を開いた上記の改正臓器移植法の「死」に対する考え方「C」を比較考察する。8は「心」と「物質」に対する概念的把握の問題という視点「A」から、ベルグソン「B」と西田幾多郎「C」とを比較考察し、そのうえで心と物質という概念的な前提条件を解消することの妥当性を考察する。

以上のように、本年度の八つの研究発表もまた、「トピックAをめぐるB思想とC思想の比較考察」という基本的な枠組みを設定し、それぞれに興味ぶかい考察を加えている。この枠組み自体は比較思想研究の基本的なアプローチとして認知されており、トピックや視点に相当するAを欠いた包括的な比較考察

はかなりの困難をとまなうであろうし、他方また、BあるいはCのいずれかを欠いた考察は、そもそも比較思想の名に値しないともいえるであろう。

二 比較思想研究の意義

いうまでもなく、「比較」という作業は、およそすべての学問に共通する方法でもある。人文学分野、社会科学分野、自然科学分野というような学問分野の相違をこえて、そもそも学問という営みは、分析や比較考察という手法を共有しているといえる。学問には、実験やフィールドワークを方法論上の基礎とするかどうにかかわらず、直接の対象となる事物、現象、人物、著作、思想等々を、同じカテゴリーに属する他の関連する項目と比較考察することをおして、特定の結論を導くことが求められる。

このような「比較」という方法を、一見して脈絡がなさそうな複数の思想や宗教等の間にあえて自覚的に適用するとき、比較思想をはじめとする比較宗教、比較文学、比較文化、比較文明等の比較諸学が成立する。これらの「比較」を冠した学問領域は、いうまでもなく際限なく専門化し細分化しつつある既存の学問領域を架橋して考察することに大きな意義と必要性が認められたからである。（むろん、それら複数の思想や文化間になんらかの共通した文脈が認められることも少なくはない。）いずれにせよ、学問に共通する基礎的な方法ともいえる前者の

比較が基礎的比較 (fundamental comparison) であるのに対して、比較思想等の比較諸学における比較は超分野 (cross-field) 型で、応用的比較 (applied comparison) というような性格をもっている。

三 比較思想の困難さ

しかしながら、ここにまた比較思想という学問研究の難しさがある。比較という方法には、いうまでもなく類似性と相違性の両面を多角的に理解することが求められる。ところが、往々にして既存のディシプリンに所属する研究者にとつて、たとえば言語上の障壁を克服したとしても、B思想とC思想の両者を、それぞれの思想的な背景をもふまえながら的確に理解することはかなりの困難を伴う。このため、BとCのいずれかの思想の専門研究者が、幅広い知識と問題意識をもちながらも、いきおい専門とはいいがたい分野の思想との比較考察を行うことになる。（ここにいう「専門」と「非専門」の主要な境界は、当該の文献や思想を支える思想的な背景や関連研究に通じているかいないかにある。）

その結果、比較思想研究は少なからぬケースで、バランスを欠いた比較考察となり、それゆえまた相違性以上に類似性の抽出という偏った作業になりかねないのである。ときにまた、幅広い視野と問題意識をもった専門家の道楽以上のものではないなどという辛辣な声も発せられることになる。

おわりに——いくつかの提言

ここでは最後に、以上のような方法論上の問題を見据えながら、比較思想研究についての展望とともに、いくつかの提言を考えてみたい。

まず、比較思想研究の意義は、学問の細分化とともに、一方でまたグローバル化がすすむ今日にあつて、いまなお大きなものがあるように思う。しかしながら、問題はその作業と成果が有意義であるかどうかの一点にある。その成果が、ただ単に個人的な関心と呼ぶかどうかではなく、学問的に意味があり、また社会的に意義が認められるかどうかである。そのような成果として認知されるかぎり、それをもたらし比較思想研究もまた学問研究の一分野として、今後とも期待が寄せられることにもなる。

では、そのような期待に応えるには、いま何が求められているのであろうか。

その第一は、学会としてつねに方法論上の批判的な総括と研究成果についての厳格な検証を怠らないことである。比較思想研究は、先に述べたように、基本的に越境型（＝超分野型）で応用的な比較を行うために、その方法についても成果についても未検証のままに放置されやすく、また厳密な意味での査読もまた容易ではない。この問題を克服するためには、比較対象となるBとCのそれぞれの思想の専門研究者にコメントや査読

を依頼するなどの方策も有効であろう。

第二に、特定のテーマを掲げたパネルやワークショップをさらに充実させるのも一案である。個人の研究発表の質的なレベルアップを図り、同時にまた、比較されるべきBとC（とD等）のそれぞれの専門研究者を集めたパネルや、本格的なワークショップなど有意義であろう。

第三にまた、複眼的な視野をもった比較思想学会であればこそ期待される社会的な貢献もあるように思う。生命倫理や環境倫理、情報倫理、産業倫理、さらにはまた政治倫理や経済倫理などの応用倫理諸問題に関連して、現代社会が抱えるさまざまな問題を共通テーマとして取りあげ、その議論と成果を学会誌のみならず、単行本や、あるいはまた学会のホームページなどを通して社会的に発信するのも一案であろう。

（さいとう・あきら、インド仏教学、東京大学大学院教授）